芸術、愛、革命――深く胸を打つバンド・デシネ!!!

PRESS RELEASE

「ムチャチョ ― ある少年の革命」

Contact :

Euromanga LLC
フレデリック・トゥルモンド
150-0013 東京都渋谷区恵比寿 2-25-7-103
Tel :080-3406-4677
euromanga78@yahoo.co.jp
www.euromanga.jp

タイトル：「ムチャチョ ― ある少年の革命」
著者：Emmanuel LEPAGE　エマヌエル・ルパージュ
翻訳者：大西愛子
発売予定：2012 年 4 月 12 日
出版社：飛鳥新社
本体価格：2700 円 + 税
ISBN :　978-4-86410-159-2
版型：上製 A4、176 ページ、フルカラー
© EUROMANGA L.L.C

ストーリー：

1976年、南米ニカラグア。独裁者"タチート"ソモサとその軍隊がこの中米の小国を支配している。首都マナグアの良家の息子で若い修道士のガブリエルは、キリストや聖者、"キリストの受難"など宗教画を描くのに長けており、その才能を見込まれ、山岳地帯の小さな村サン・フアンのルーベン神父のもとに送られる。最初は権力者の側近の裕福な家系ということで村人から疎まれていたガブリエルだが、次第に村人たちと深く係わり、彼らのことを知り、愛するようになる。そこに至るまでにはルーベンの励ましがあった。ルーベンはガブリエルに村人を血の通った肉体を持つ生身の男や女として描くことを勧めたのだ。「ものの表皮をめくる」ことにより、ガブリエルは徐々に農民を迫害する軍隊のことだけでなく、自分に重くのしかかる自身の欲望と官能をも発見することになる。彼にとっても村人にとっても、抵抗の時が目覚めつつある革命とともにすぐそこまで来ていた……

芸術、愛、革命――『ムチャチョ』は、若き修道士の複雑かつ波乱万丈な運命を通して描かれる情熱の物語だ。作者エマニュエル・ルパージュは、熱く率直な思いを込め、その才能と豊かな人間性を駆使して普遍的なテーマの作品を造り上げた。深く胸を打つのみならず、愛と政治参加(アンガジェ)についても考えさせられる作品。

「うどんの女」、「ゴロンドリーナ」、今最も注目している若手マンガ家えすとえむ氏絶賛!!!

「自然が創りだす光と影、人の手が作りだす光と闇、その美しさ残酷さを描き切ったルパージュの手は私の心臓をわし掴んだまま離してくれない。」
えすとえむ（漫画家）

Emmanuel LEPAGE　エマヌエル・ルパージュ

1966 年 9 月 29 日、ブルターニュ地方サン・ブリユック県に生まれる。彼のバンド・デシネとの出会いは 6 歳のとき、『タンタン』を読んだことに始まる。13 歳で、『スピルー』の作画家ジャン = クロード・フルニエの個人指導のもと、バンド・デシネの作画を学び始める。建築の勉強の傍ら、ルパージュは最初のアルバム 2 冊を 1987 年と 1988 年にブルトン・ウエスト・フランス社から出す。1989 年と 1990 年にはロンバール社から『L'Envoyé（仮題:派遣者)』（シナリオ：ユゲット・カリエール）を出版する。一般読者の注目を浴びるようになったのは、1991 年から 1997 年にかけてグレナ社から出た『Névé（仮題：ネヴェ)』（シナリオ：ディーテル）シリーズの 5 巻本。登山中の事故で父親を亡くした少年が大人になっていく過程、その成長を描いた作品である。またルパージュの名を揺るぎないものにした 2000 年刊行の『La Terre sans mal（仮題：悪なき土地)』（シナリオ：アンヌ・シブラン）は、アマゾンの奥地で原住民の集落と出会う女性記者の物語だ。この作品はルパージュ自身の中南米での 8 ヶ月の長期滞在がもとになって生まれたが、この体験を元に、ほかにも『Brésil（仮題：ブラジル)』と『America（仮題：アメリカ)』という 2 冊の旅行記をまとめ、さらに 2004 年と 2006 年には、彼の代表作ともいえる『ムチャチョ』の 2 部作を出している。その後、フュテュロポリス社から、同じ日にフランスで生まれた 3 人の少女の成長と人生を描いた『Oh les filles（仮題：少女たちよ)』（シナリオ：ソフィー・ミシェル）を 2008 年と 2009 年に、また 2011 年には、インド洋の南、南極地域にあるケルゲレン諸島への旅を描いた『Voyage aux Iles de Désolation（仮題:悲嘆の島々への旅)』を刊行。現在、エマニュエル・ルパージュは、2008 年にある協会のためにチェルノブイリに滞在したときの体験を題材にした作品を制作中。

『ムチャチョーある少年の革命』について

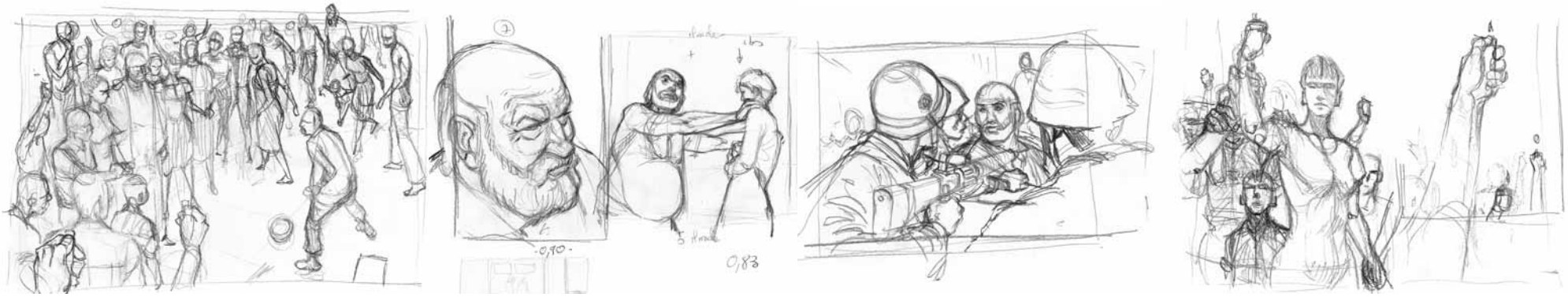
エンキ・ビラル『モンスター』［完全版］に続いてユーロマンガがお送りする単行本はエマニュエル・ルパージュの『ムチャチョ－ある少年の革命』（Emmanuel Lepage, Muchacho）である。作者名、作品名ともに初めて耳にしたという読者がほとんどではないだろうか？　エマニュエル・ルパージュの代表作として高く評価されているのが、『ムチャチョ』である。彼は原作者と組んで BD を描くことが多いが、本作ではシナリオも作画も彼自身が手がけている。シナリオも作画もこなす BD 作家を auteur complet (オトゥール・コンプレ)（完全な作者）と呼ぶが、ルパージュはこの作品でその呼び名にふさわしい仕事をしている。

物語の舞台は 1976 年、タチートとあだ名されるアナスタシオ・ソモサ・デバイレ大統領による独裁政治まっただなかのニカラグアである。当時、ソモサ政権は国家警備隊を使った恐怖政治を敷いていたが、その行き過ぎたやり方に人民の間で不満が高まり、サンディニスタ民族解放戦線を中心とする武力的な抵抗が広がり始めていた。

そんな折、とある山村に政財界の大立者であるデ・ラ・セルナ家の子息ガブリエルが到着する。神学生である彼はその絵の才能を買われ、さびれた教会にキリスト受難の壁画を描くべく、師であるホアキンに伴われ、この地を訪れたのである。貧しいながらも生き生きとした人々の生活を目の当たりにしたガブリエルは、それまで自分が描いてきた絵が借り物に過ぎなかったことに気づき、見る者の魂を揺さぶる壁画を完成すべく画業に励む。しかし、やがて政府と反乱軍の対立が村とガブリエルをも巻き込んでいく。村人たちが反乱軍のゲリラと通じていることが露呈し、ガブリエルと懇意にしていた村人たちは罰せられ、ガブリエル自身も拘束されてしまう。

名家の出身という立場上、いかなる咎めも受けることはなかったが、ガブリエルは良心の呵責を感じ、密林の中へと姿をくらます。やがて彼はゲリラたちのもとに身を投じ、極限的な生活の中で自分の存在意義を発見していく。自らの欲望と神の教えの間で心を揺らしつつも、ガブリエルは仲間とともに国家警備隊に立ち向かうことになる……。

この作品の見所は何より見事に彩色された一コマ一コマの絵であろう。フランス語オリジナル版の出版社はデュピュイ（Dupuis）だが、この作品が収められた叢書 Aire libre には、物語的にもグラフィック的にも優れた大人向けの作品が多く収められている。『ユーロマンガ』に連載されているジブラ作『赤いベレー帽の女』がやはり同叢書に収められていると言えば、おおよそのイメージはつくかと思う。佳作揃いの同叢書の中でも、『ムチャチョ』の華麗なグラフィックは特に際立っている。絵にあまりに力が入りすぎた作品には、コマの構成が弱かったり、ナレーションによる説明に頼りがちになったりして読みやすさが犠牲になることがままあるが、この作品は一コマ一コマの完成度にもかかわらず、安易にナレーションに頼らず、巧みなコマ割りとセリフで登場人物の感情やアクションを描ききり、読者の心を掴んで離すことがない。伝統的な BD には登場人物の感情を言葉で表現するものも多いが、この作品ではそれが登場人物の表情や雰囲気のある情景を通じて表現されており、表情豊かな日本マンガに慣れた私たちにとってもさほど違和感なく受け入れられるのではないかと思う。

　タイトルからも想像されるように、主人公の成長がはっきりと感じられるという点でも、この作品には親しみやすさがある。主人公のガブリエルは神学生という禁欲的な環境から出発し、村人たちの天真爛漫な生活を目の当たりにし、自ら行動を起こす中でセクシュアリティを自覚するに至る。このような描写は従来の BD ではさほど掘り下げられてはこなかったが、ここでは深みのある登場人物を造詣する上で大いに役に立っている。ニカラグア革命という私たち日本人にとってはあまり馴染みのない主題を扱ってはいるが、『ムチャチョ－ある少年の革命』は読者を引き込んでやまないすばらしい作品だと言っていいだろう。

（バンド・デシネ翻訳家・研究家　原正人より）